

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 8 月 17 日現在

機関番号：32526

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24531031

研究課題名(和文)日独性教育比較に基づいた、性教育における男子支援に関する研究

研究課題名(英文) Research on the work with boys on sexual education based on the comparing sexual education in Japan with sexual education in Germany

研究代表者

池谷 壽夫 (IKEYA, HISAO)

了徳寺大学・健康科学部・教授

研究者番号：90136367

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツの性教育研究者との共同研究にもとづいて、日本とドイツの性教育の問題を比較・検討することで、日本とドイツの男子が共通に抱える問題と異なる問題を明らかにするために、日本とドイツの15～19歳の青少年を対象にした「青少年の恋愛と性に関する国際比較調査」を共同実施し分析した。その結果、特に日本では、初経教育とともに精通教育も重視した、思春期準備の性教育、自他の性的身体の尊重と結びついた関係の性教育、セクシュアリティに潜む伝統的なジェンダー規範を揺さぶる性教育、青少年のポルノ・コンピテンスを高める性教育などが必要であることが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：In order to find out the problems which Japanese boys and German boys have, we carried out the international questionnaire investigation on youth's love and sexuality in cooperation with the German professors on sexual education. As a result, we suggested that following themes on sexual education are necessary and very important: 1. the preparatory education for the puberty, involving education for pollution; 2. relational education involving respect for both one's sexual body and other and avoiding sexual violences; 3. sexual education sensitive to the traditional gender norms hidden in sexuality; 4. sexual education enhancing porno competences of boys etc.

研究分野：ジェンダー、セクシュアリティと教育

キーワード：ジェンダー セクシュアリティ 性教育 男子支援

## 1. 研究開始当初の背景

すでに EU ではジェンダー・メインストリーミング政策下での男女共学の見直し（例えばドイツの「再帰的男女共学」）と女子の積極的支援のなかで、男子の「問題性」がしだいに浮き彫りになっている。

第 1 に、男子の学力低下が問題にされ、「できない男子」「男子はなぜ女子より劣るのか」が論議されている。第 2 に、その際今日の産業構造の変化とそこで求められる能力が伝統的な「男性性・男らしさ」と軋轢を起こしていることが指摘される。その上で、学校における自己社会化プロセス（「(諸)男性性」の形成プロセス）とその負の問題点が指摘されるとともに（Connell 2000; Mac an Ghail 1994）伝統的な「男性性」との対決（新たな「男性性」の模索や脱構築）が重視されている。

第 3 に、親密圏における男子の暴力問題（性的暴力、デート DV、イジメ等）やセクシュアリティに重点が置かれ、具体的な男子援助活動が展開されている。こうした男子問題への取り組みの中で、男子に対する見方が 180 度転換されつつある。すなわち、女子や教師に問題ばかりを起こすトラブルメーカーとしての男子から、トラブルを抱える男子へと視点が転換されつつある。また、男子に対する特別な支援として、学校や学校外の青少年施設では、男女共学のもとで「一時的別修」が試行されている。これまでの女子支援のための一時的別習と並んで、今日では男子のための「保護空間」が設けられ、一時的別修が試みられている。

以上の男子問題は、最も親密な関係でのセクシュアリティの領域で顕在化している。例えば、ドイツの男子援助活動では、以下の問題が指摘されている。

第 1 に、女子に対して頻繁に行われている男子のセクハラ、性的暴力の問題がある。

第 2 に、男子自身が抱えるセクシュアリティに対するおそれや不安が、「男性性」にとられて隠蔽されたり、あるいは話してもまじめに受け止めてもらえない。第 3 に、男子の性的知識の貧困が指摘される。その一方で、男子はメディア（ビデオ、青少年雑誌、インターネットなど）からセクシュアリティに関する情報を得ており、ジェンダー・ステレオタイプのな役割を受容していく。第 4 に、身近に性的なテーマについて話せる大人がいない。最後に、ホモセクシュアルとホモフォビアの問題がある。

日本でも男子は同じような課題を抱えている。筆者も参加した『10 代の性感染症急増下の日本における性教育の実態と課題に関する研究』（2006～2008 年度、科研基盤 B、研究代表者：橋本紀子）や性教育調査（日本性教育協会編 2007；2013）からも、男子は性的無知状態におかれ、身近な相談相手もなく、女子とどう付き合っているかわからない、といった問題を抱えていることがわかる（池谷 2009b）。また、澁谷（2008）でも男子問題が指摘されている。

しかも、近年性交経験が減り、「草食系男子」と言われているにもかかわらず、高校 3 年男子の性交経験率は 27.6%と女子の 18.1%を上回っている（東京都幼・小・中・高・心性教育研究会編 2014）。それなのに正確な避妊知識を持っている男子は少なく、膣外射精を避妊方法の 1 つだと思ったりしている。そのうえ、男子の女子に対するデート DV も問題化している。こうした状況においては、性教育においても、女子の支援と同時に男子の支援も重要な課題となっている。

こうしたなかで、近年ようやく日本でも男子が抱えるセクシュアリティの問題性が本格的に論じられつつある。

## 2. 研究の目的

日本とドイツの性教育をめぐる状況には

共通性が見られる。1 つは、日本とドイツは、性教育をめぐってバックラッシュにあってのことである。2 つ目に、日本とドイツは、男女平等意識においてはヨーロッパ先進国に比べて遅れている点で共通している。もちろん、この間のドイツでの男女平等政策は急速に押し進められているが、例えば、子育てに関しては、子どもが小さいうちは、女性は子育てに専念すべきであるという意識（いわゆる「3歳児神話」）が根強く残っており、就学前の社会的保育は遅れている。

そこで、本研究では、こうした共通性をもつ日本とドイツの性教育を比較するための基礎作業として、15～19歳の青少年を対象に、セックス観・セクシュアリティ観・ジェンダー観を中心とした性意識調査を行うことにした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 「青少年の恋愛と性に関する国際比較調査」までの経過

本調査には茂木輝順と加野泉も参加した。この調査に向けて、池谷のよびかけのもとに、2013年10月9日に日本とドイツの性教育学関係の研究者がキール大学に集い、研究関心の共有を図った。参加者は、Jürgen Budde（フレンスブルク大学）、Uwe Sielert（キール大学）、Anja Henningsen（キール大学）、Beate Proll（ハンブルク州学校教育開発センター・性教育担当）、Christoph Behrens（インドネシア大学）、池谷壽夫（日本）で、ここで研究者の問題関心、アンケートの内容、方法論、今後のスケジュールなどが話し合われた。

この会議を受けて、翌2014年3月25日に第2回の会議がHamburg州学校教育開発センター内で行われた。この会議では、理論的なフォーカスとして、「男らしさ」と「ジェンダーアイデンティティ」「性的指

向」の2つの柱をたてること、対象年齢については当初日本側の提案では13～15歳としていたが、日本の中学校での調査実施の困難さや、日本とドイツとの間の性的成熟の大きな違いもあり、年齢対象を17歳までに広げることも考えることなどが話し合われた。

これを受けて、本調査のためのプロジェクトの取り決めが2014年9月になされた。また、この間に日本とドイツ双方でアンケート調査の対象者、質問項目の検討が行われ、その結果対象者は当初の13～15歳から16～18歳を中心にするようになった。その結果日本では、高校生と大学1年生（15～19歳）を調査対象とすることにした。なお、この過程でインドネシアでは、アンケート調査の多くの困難があることがわかり、そこでの実施は断念された。

#### (2) 本調査の目的と課題

本調査の目的と課題は、まず第1に、青少年のセクシュアリティ・スクリプトを、日本とドイツを比較しながら明らかにすることである。ここで「セクシュアリティ・スクリプト」とは、「性的事象に関する知識あるいは性行動に関する考えないしはそれに関する経験」を指すが、本調査ではそれをまず身体・関係・セクシュアリティの次元でとらえようとしている。しかし、ジェンダー・アイデンティティもセクシュアリティ・スクリプトにとって一つの重要な要因であると考えられるので、もう一つの次元としてジェンダー・アイデンティティに関する質問がなされている。

今日先進国に共通した青少年の性の重要な課題は、この青少年のセクシュアリティ・スクリプトにメディアが早い時期から大きな影響を及ぼしていることである。第2の課題は、日本とドイツの青少年の比較調査をつうじて、日本の青少年、とりわけ

青少年男性が固有に抱える性的課題を浮き彫りにすること、また、そのことをとおして青少年が抱える固有の性的課題に応じた性教育の課題とテーマを明らかにすることである。

### (3) 本調査の内容構成

上記の目的と課題を達成するために、質問項目を大きく以下の5領域から構成することにした。

1. セクシュアリティ・コンセプト(性行動、メディアの影響の意味、性知識.....)
2. 身体コンセプト(自己像、理想化、恥、メディアの影響の意味.....)
3. 関係コンセプト(パートナーシップ、将来の考え、暴力.....)
4. ジェンダー・アイデンティティ(ヘテロセクシュアリティ、ホモセクシュアリティ、クイア、トランスジェンダおよびインターセクシュアリティ、男性性と女性性の観念)
5. 学校や親から提供される性教育の内容

そして、メディアが青少年に及ぼす影響を明らかにするために、それを横断的テーマとして設定している。

### (4) 本調査の方法と実施概要

#### 調査方法と実施概要

調査に先立ち、本調査について2014年10月30日に了徳寺大学生命倫理審査委員会での審査を受け、承認され(受付番号:2629)、承認されたとおりの調査方法で実施した。

本調査は、2014年11月から2015年2月にかけて実施した。調査対象としたのは、高等学校9校(公立共学校4校(うち1校は定時制)、私立共学校2校(うち1校は定時制を併設)、私立女子校2校、私立男子校1校)と、大学4校(私立共学2校、国公立共学2校)であった。ドイツでは、キール

市とフランクフルト市でアンケート調査が同時期に実施された。前者では、3つの総合制学校(Gesamtschule:回答者数125名)、1つのギムナジウム(回答数63名)で実施された。後者では、ギムナジウム上級段階が附属している協同総合制学校(kooperative Gesamtschule)の9・10学年を対象に152名から回答が得られた。

#### 統計的検定

SPSS ver. 22によって、<sup>2</sup>検定、t検定、主成分分析、因子分析、重回帰分析を行った。有意水準は5%とした。

### 4. 研究成果

アンケート調査およびこの間の本研究者のドイツに関する性教育研究をふまえて、研究成果報告書として池谷・加野・茂木『日独性教育比較に基づいた、性教育における男子支援に関する研究』を出した。ここでは、以下の課題に取り組むことが必要かつ重要であることが明らかにされた。

#### (1) 性の基本的事項に関する学習水準を高めるという課題

#### (2) 思春期への準備としての性教育の必要性

#### (3) 自他の性的身体との関わり合いを学ぶ性教育(その1)

#### (4) 自他の性的身体との関わり合いを学ぶ性教育(その2)

#### (5) セクシュアリティに潜む伝統的ジェンダー規範を揺さぶる性教育

#### (6) 「ボルノ・コンピテンス」を高める性の学習

#### (7) 保護者を性教育に巻き込むことの重要性

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計13件)

##### 1. 池谷 壽夫

- 2014a「セクシュアル・ライツとは何か リプロダクティブ・ライツからセクシュアル・ライツへ」『教育学研究室紀要 教育とジェンダー 研究』(女子栄養大学栄養学部)第11号
- 2014b『ヨーロッパにおけるセクシュアリティ教育スタンダード』 その背景と特徴」季刊『セクシュアリティ』No.65
- 2014c「最近のドイツにおける性教育をめぐる論争と性教育の課題」『現代性教育ジャーナル』(日本性教育協会)No.41
- 2015a「ポルノ化社会における性教育の課題」『民主教育研究所年報2014』(民主教育研究所)第15号
- 2015b「セクシュアル・ライツの系譜と課題」『教育学研究室紀要 教育とジェンダー 研究』(女子栄養大学栄養学部)第12号
- 2016a「ジェンダー平等教育とセクシュアリティ教育の課題」『民主教育研究所年報2015』(民主教育研究所)第16号
- 2016b「脆弱性」からセクシュアリティと道徳を考える」季刊『セクシュアリティ』第77号、62-70
- 2017 Noriko Hashimoto, Kaori Ushitora, Mari Morioka, Terunori Motegi, Kazue Tanaka, Mieko Tashiro, Emiko Inoue, Hisao Ikeya, Hisashi Sekiguchi, Yoshimi Marui & Fumika Sawamura, School education and development of gender perspectives and sexuality in Japan. *Sex Education*, 13 Feb 2017.

## 2. 茂木輝順

- 2014「セクシュアリティをめぐる国際的動向 - 性の権利/健康, 性教育に関する国際的文書・宣言」『民主教育研究所年報2014』(民主教育研究所)第15号
- 2016「今年度(2016)の高校1年生(2000年度生まれ)が手にした教科書から性教育の内容を概観する」『性の健康』(性の健康医学財団)第15巻3号
- 2017 Noriko Hashimoto, Kaori Ushitora, Mari Morioka, Terunori Motegi, Kazue Tanaka, Mieko Tashiro, Emiko Inoue, Hisao Ikeya, Hisashi Sekiguchi, Yoshimi Marui & Fumika Sawamura School education and development of gender perspectives and sexuality in Japan. *Sex Education*, 13 Feb 2017

## 3. 加野 泉

- 2016「アメリカ『ヘッドスタート』の多文化主義理念 尊重と統合のはざままで」『Autres』No.7, 研究・教育連携オートル(CREA)
- 2017「承認される文化の境界線 アメリカ・ヘッドスタートの多文化主義」『社会文化研究』第19号、社会文化学会

### 【学会発表】(計5件)

- 2015 加野泉・茂木輝順・池谷壽夫「性情報の捉え方と自己肯定感 青少年の恋愛と性に関する国際比較調査から」社会文化学会第18回大会(龍谷大学深草キャンパス、2015.12.06)
- 2015 池谷壽夫「性の問題をめぐる男子の状況と

性教育の課題 今こそ、男子の性と向き合おう」日本子ども社会学会 第22回大会テーマセッション「男子問題の時代か? - 子どもとジェンダーをめぐる状況と課題 -」(愛知教育大学、2015.06.27)

- 2016 茂木輝順「青少年の恋愛と性に関する調査研究報告」教育研究全国集会2016(静岡県立大学、2016.8.20)
- 2016 加野泉「アメリカ・ヘッドスタートの家族支援」社会文化学会中部支部研究会(日本福祉大学名古屋キャンパス、2016.1.23)
- 2017 池谷壽夫「イギリス(とくにイングランド)の性教育」第25回全国教育研究交流集会(民主教育研究所・埼玉教育文化研究所共催、埼玉大学教育学部;2017年1月8日)

### 【図書】(計2件)

- 2016 池谷壽夫・市川季夫・加野泉編著『男性問題から見る現代日本社会』はるか書房
- 2017 改訂版『ハタチまでに知っておきたい性のこと』(分担執筆)大月書店

### 【その他】

研究代表者のホームページを作成した

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

池谷 壽夫 (IKEYA, Hisao)  
了徳寺大学・教養部・教授  
研究者番号：90136367

### (2)研究分担者

茂木 輝順 (MOTEGI, Terunori)  
女子栄養大学・栄養科学研究所・客員研究員  
研究者番号：40570677

### (3)研究協力者

加野泉 (KANO, Izumi)  
日本福祉大学・社会福祉学部・非常勤講師  
研究者番号：なし

ジーラート、ウーヴェ (SIELERT, Uwe)

ヘニングステン、アーニャ  
(HENNINGSTEN, Anja)

プロル、ベアーテ (PROLL, Beate)

ベーレンス、クリストフ (BEHRENS, Christoph)

ブッデ、ユルゲン (BUDDE, Jürgen)

バーム、マイカ (BOEHM, Maika)